

## W. ベ ッ ロ の ア キ ノ 論

稲 正 樹\*

(1984年6月30日受理)

本稿は、Walden Bello, "Benigno Aquino: between dictatorship and revolution in the Philippines", *Third World Quarterly*, Vol. 6 No. 2 (April 1984), pp. 283-309. を訳出したものである<sup>1)</sup>。著者のベッロはフィリピン市民であり、現在フィリピン団結網米議会担当部主事 (director of the Washington-based Congress Task Force of the Philippine Solidarity Network) を勤めている。彼は1975年プリンストン大学で社会学博士号を取得後、同年にニューヨーク州立大学オールドウェストバリー校で政治経済学を、1976-81年カルフォルニア大学バークレー校で農村開発及び環境問題を講じた。なお「フィリピン団結網」(PSN) とは、フィリピンにおける合衆国の軍事的・経済的・政治的支配を暴露してそれに反対し、公正で民主的な社会を求めるフィリピン人民の闘争を支援する活動をしている。PSN は「フィリピン人民の友」(Friends of the Filipino People)を継いで1973年に全国組織として設立され、公衆教育・講演旅行・草の根の組織活動を行い、また労働運動・女性問題・部族民・合衆国軍事基地・抵抗運動を含む広範なフィリピンの諸問題について文献及びスライドの製作・配布を行っている。その議会担当部 (Congress Task Force) は、ワシントンを基盤とする PSN 及びマルコス独裁反対連合 (Coalition Against the Marcos Dictatorship) の調査とロビー活動のための組織である<sup>2)</sup>。

本論文は「支配階級政治家」アキノの出自を述べた後 (支配階級政治家の形成)、戒厳令の賦課を、新植民地支配体制への致命的な脅威の出現に対する一つの階級対応と把握する。アキノらブルジョア民主主義者たちは、戦後フィリピンのシステム——即ち地主=コンプラドールのエリートの指導する形式的立憲制度——の破壊を合衆国が容認しないだろうと確信していたが、時代は変わりつつあった。それはアメリカにおける権威主義理論の登場である (アキノと共和国の危機)。次にベッロは新秩序を支える者として、軍・マルコスの仲間・テクノクラートの存在を指摘する (アキノと新秩序)。70年代に進展した左翼・民族民主戦線 (NDF) からの挑戦に対して、野党エリートは異なった対応を示したが、その中でアキノは、左翼との競争に成功する一方で左翼と意思疎通のできる人物であるとのイメージの投影を図った (マルコス・アキノ・左翼からの挑戦)。釈放されたアキノはアメリカでの活動が失敗した運動だったことを了解し、また左翼へと向かう運動が後戻り不能点に近づきつつあることを懸念して帰国を決意した。その際マルコスには理性的な政治家として三つの選択肢しかないことを計算していた (国外追放者の欲求不満)。だがマルコスの個人的・政治的敵意と継承問題の危機の交差の中で暗殺が行われる (非理性的な選択がなされる)。そして暗殺は、すでに輸出志向の外国資本依存型の経済戦略の崩壊と共に体制

\* 岩手大学教育学部

1) 訳出及び本年報への掲載にあたり、発行元の Third World Foundation for Social and Economic Studies へ問い合わせ、Associate Editor の Mrs. Raana Gauhar から許可を1984年7月13日に得た。

2) Walden Bello, et al., *Development Debacle: The World Bank in the Philippines* (San Francisco: Institute for Food and Development Policy, 1982), p. 253. による。

から離反していた、中産階級の高揚をもたらした（中産階級の高揚）。本論文は最後に、アキノ以後の動揺は NDF と中産階級の二つの運動の合流から生みだされており、第三のアクターとして都市大衆がいる、更に合衆国及び国際的債権者はマルコス以後のシナリオの検討を進めているがそれには五つの障害があるとする（合衆国はその選択を検討している）。そして左翼へと向かうフィリピンの将来を展望する（動乱の将来）。

開発独裁の閉塞状況の中でフィリピンは現在、反スペイン・反米闘争・フクバラハップ運動に続く、第三の「民衆の時代」を迎えていると言われる<sup>3)</sup>。その中で本論文は UNIDO（民主野党連合）ではなく、NDF の成長に期待を寄せる<sup>4)</sup> 左派の代表的な現状分析を示すものである。なお本論文では取り上げられていない経済問題への著者たちの見解<sup>5)</sup> をここで紹介し、解題の補足としておこう。

[ベッロは輸出志向型工業化 (export-oriented industrialization) を含めた世界銀行によるフィリピン経済への介入の帰結を、以下のように説明している。世界銀行 (WB) がフィリピンに導入した開発計画には二つの基本目標——「鎮静化」<sup>パンファイケーション</sup>「自由化」<sup>リベラライゼーション</sup>——があった。前者は農村と都市の開発計画からなり、後者はフィリピン工業の思い切った再編と対外貿易戦略を意味した。この「テクノクラートの近代化」戦略を実施するため、WB は権威主義的政府の形成を奨励し、テクノクラートのエリートを注意深く養成した。しかしこの戦略は主にその内部矛盾のため失敗した。農村開発は、生産力にのみ焦点をあて、また政治的経済的不平等関係を変える真剣な努力が伴わず破綻した。都市開発は、経費回収等の資本主義的金融原理へ執着し、決定過程において「受益者」に有意義な役割付与を拒否したため目標を達しなかった。これらの計画は民衆の抵抗を生みだした。そこでフィリピンにおける WB の存在意義は輸出志向型工業化 (EOI) にかかることになる——それはこの国に僅かの「工業化」を許しながらも、同時に多国籍企業の支配する世界大の経済システムの中により十分に統合するという計画である。しかし EOI は、その内部矛盾とそのモデルの依拠する二つの支柱——従順で安い労働力と拡大する国際市場——の消失によって、破綻した。農村開発・都市開発・EOI の崩壊と共に、WB 及び IMF は自由化という純粋に抑圧的な計画に拠ることになる。関税障壁の打破・民族資本家階級の破壊・合衆国の企業や銀行のニーズに一層役立つための財政構造の変形が、その主な教義である。このコースは、国際不況によって市場が痛めつけられている時により完全に世界市場に依存するようにし向けた点で、フィリピンにとって自殺的であった。]

3) 鈴木静夫「アキノ事件から一年のフィリピン」エコノミスト 1984年8月28日号 48-53頁。なお R. S. ダビッド、内山秀夫訳「開発独裁と民衆運動」同上誌 1984年8月7日号 52-58頁も参照。

4) W. Bello, "The forms and causes of political repression in the Philippines", in Permanent People's Tribunal, Session on the Philippines, *The Philippines: Repression and Resistance* (London: KSP, 1981), pp. 115-156, at 148-150. も同旨。

5) W. Bello, et al., *Development Debacle*, pp. 198-199.

## ウォルデン・ベッロ「ベニグノ・アキノ——フィリピンにおける独裁制と革命の間——」\*

歴史の驚くべき皮肉の一つであるが、殺害されたフィリピンの野党指導者ベニグノ・アキノ (Benigno Aquino) は生前なし遂げ得なかったこと——マルコス (Marcos) 独裁制の打倒——を、死において完遂しつつある。恐らくこの出来事の劇的な転回により最も驚かされた——また悪意を覚えた——人物は、フェルディナンド・マルコス (Ferdinand Marcos) 自身である。今や大部分のフィリピン人は彼を、1983年8月21日のマニラ国際空港の空港ランプでの信じられない処刑の黒幕として見なしている。

周知の通り「歴史における(自らの)場所」に腐心している病める独裁者にとって、彼の積年のライバルが英雄として歴史の中に入った一方で、悪漢としてその中に入りつつあるのを悟りながら最後の日々を過ごすことはいかに苦々しいか、想像するのにかたくな。著名な政治映画製作者コスタ・ガヴラス (Costa-Gavras) はこれより凝った筋立てを求めることができなかった——つまり二人の名政治家は彼らの個人的競争・政治闘争・最後の死に至るまでの対決において、第三世界に位置する国の社会的矛盾と歴史的選択肢を体現している。それはまた殺人が被殺者を不死にし、殺人者を滅ぼすという——最良の古典悲劇を特色づける劇的な皮肉に色どられた物語でもある。

マルコスと同じく、50歳のアキノは——現在フィリピン野党の一部が自らの政治目的のためにアキノをその信奉者として改造しつつあるが——ガンディー主義的非暴力の信奉者とは全身これまったく異なった、複雑で矛盾を含んだ人物だった。しかし議論の余地のないことが一つある。それはアキノが心から勇気のある人だったということだ。5年の投獄によってもマルコスへの忠誠の誓いを引き出さなかったため、1977年に死刑宣告の憂目にあったのも、この断固たる勇気という性質だった。そして8月21日土用の午後アキノをして歴史との約束に押し進めたのも、強い野心と彼の階級の戦略的利益への深い関心に結びついた、この勇気であった。

ルーリング クラス ポリタイシヤン

### 支配階級政治家の形成

「ニノイ」(‘Ninoy’) アキノはまず第一に一人の支配階級政治家だった。そして彼の短い流星のような経歴は、ある種の第三世界の政治家のなかで個人の野心・階級利益・民衆の正統性の要請が交差している複合状態の顕著な典型——ブルジョア民主主義者——を示すものである。

全国政治に係わった歴史をもつ豊かで有力な地主の家に生まれたニノイは、1946年から1972年まで議会制共和国を統治した支配階級政治の準則を、素早く習得することを学んだ。彼は22歳で町長に選ばれ、28歳で出身州タルラック (Tarlac) の知事となり、35歳でフィリピン上院の選挙に勝った最年少者たることの名声を得た。

アキノが習得したシステムは、土地を基盤とするまた商人であるエリート間の権力を求める競争にアメリカ人植民地官吏が付加した、形式的な選挙制度であった。これらエリートたちは階級路線に沿った政治組織が未発達な社会において、親戚関係と恩顧を通じて下層階級を動員するこ

\* 脚注のないアキノからの全ての引用は、1981年1月—1983年7月の間の著者との個人的会話・インタビューによる。アキノ暗殺後の合衆国諸機関の秘密の討議からの引用は、匿名を希望した関係者・コンサルタントから与えられたものである。

とにより、政治の役職を求めて戦った。新植民地共和国における「民主的<sup>バグナタリズム</sup>代表」は、フィリピン・エリートの伝統的・封建的な家父長主義にアメリカ式被後見政治の最悪の特徴を結びつけたものであり、それは狭い階級利益を保護し制度化された略奪の形をとる芸術であった。恩顧民主主義の本質の古典的表現は、フィリピン大統領へ警告を述べたかつてのフィリピン上院議長の次の言葉に見られる——「権力の濫用を許すことができないとしても、あなたは少なくとも大目に見なければなりません。私たちは何のために権力の座にいるのでしょうか。私たちは偽善者ではありません。実際にはそうでないのに、なぜ私たちは聖人のふりをしなければならないのですか。」<sup>1)</sup>

ニノイをして1969年までに、継承した権力地盤を持つ地方政治家から野党自由党の書記長へと急速に上昇することを可能にしたものこそ、「正しい」エリート連合を集成する上での類いのない戦術的技量であったし、それには大衆のカリマスと「反腐敗」・「改革」・「社会正義」ということさら漠然とした修辞法が結びつけられていた。この地位からアキノは大統領職を追求し始め、フェルディナンド・マルコスの2期目が終わる1973年までにはそれを獲得したいと思っていた。しかしながら、迷路のようなエリート政界で行動するマキャベリ流の能力が彼に比べると抜群のマルコスと対抗しなければならないことに、アキノの不運があった。

アキノの経歴は地方政治の準則の習得によってだけでなく、国際政治の準則の習得によっても決定された。新植民地共和国の全国政治で成功するためには、その政治的・軍事的・経済的存在がかつての植民地に行き渡っているアメリカ人の好意を得ることが大いに必要だった。ニノイは若い時に、アメリカ人と気楽につきあっていた。彼は有力者や金持ちの子弟の第一級の訓練の場たるアテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila College) を経営するアメリカ・イエズス会士の手で、早めの正規の学校教育を受けた。卒業後彼は「マグサイサイ・ボーイズ」の一員となったが、それはラモン・マグサイサイ (Ramon Magsaysay) 大統領を囲む「最優秀の」アテネオ大卒業生たちからなっていた。マグサイサイは初め一介の州政治家であったが、1950年代初期に共産主義者が率いた「フク団」の反乱 ('Huk' Uprising) を破った作戦の間に、「伝説的な」中央情報局員エドワード・ランズデール (Edward Lansdale) 大佐の工作によって、民族主義的改革者・大衆的人物として出現した。(他方) ニノイは、1954年フク団の「最高司令官」ルイス・タルク (Luis Taruc) の降伏交渉に成功した時、連中の最勇者の一人として素早く注目を集めた<sup>2)</sup>。

その功績こそアキノがあえて隠そうとはしなかった、機関との長い共働関係の始まりだった。最も率直なインタビューの一つでアキノはいくらかの誇りをこめて、CIA との結びつきに注意を求めさせた——「私は多くの作戦で CIA と共に働いてきました——私がとても不屈になりうることを彼らは知っています……私は三人のフィリピン大統領を補佐しました。またかつて私たち自身の CIA を率いました。私たちはインドネシアで、ラオスで共同作戦を行い、カンボジアにいったこともありました。」<sup>3)</sup>

従ってニノイが大統領職への前進に照準を定めた時には、自分は一フィリピンの大統領政治の究

1) Steve Shalom, 'Counterinsurgency in the Philippines', *Journal of Contemporary Asia* 7(2) 1977. で引用。

2) ランズデールとマグサイサイ・ボーイズの偉業についての CIA の説明に関しては、見よランズデールの自伝 *In the Midst of Wars*, New York: Harper and Row, 1972. ランズデール後のフィリピン議会政治への CIA の干渉の解説は、前機関員ジョセフ・B・スミス (Joseph Burkholder Smith) によって彼の本 *Portrait of a Cold Warrior*, New York: Ballantine Books, 1976. でなされている。

3) 'The Philippines: the more things change, the more they remain the same, an interview with Benigno Aquino', *Multinational Monitor*, February 1981, p. 17.

極の裁定者たる——ワシントンが支持しないまでも共存し得る人物であると、当然確信していた。

### アキノと共和国の危機

しかし大統領の地位が手の届くところになった時には、彼の習得していた政治制度は破産しかけていた。それは一定の諸条件が存在する場合にのみ初めて働きうるシステムだった。一つの必要条件は、フィリピン式議会政治の不文のルールを適度に固守することだった。つまりそれは、エリートの対立諸派閥が権力の座に交互に着いて、政治的地位のもたらす戦利品を集め・分配する機会を持つようになることだった。1960年代の後期には、このルールは段々と例外的なものとなった。公選職と共に生まれる歴大な権力と富を手放すことなどありえないような政治的王朝の形成へと向かう一つの潮流が、地方・地域・全国のレベルで生じた。そのような支配力は、投票者をおどし選挙結果を奪い取る私兵を育成することによって、初めて確保されうるものであり——あるいは対立するエリートによって破壊されうるものだった。選挙がより流血を帯びるものになるにつれて、それはより正統性に欠けるものになり、システムをいよいよ不調なものにした。

しかしながら1969年11月の大統領選挙になって初めて、議会ゲームの準則へのエリートの合意が取り返しのつかないほどこわれてしまった。この年マルコスが、共和国の最初の23年間においてそれまで不可能だったこと——2期目への選出——を達成した。それは、全国的権力への伝統的経路として役立つ政治的提携網と並んで、もう一つの政治勢力——フィリピン軍——を発展させることによりマルコスがなし遂げた、一つの偉業だった。マルコスは、フィリピンの「最も多く受勲した第二次世界大戦の退役軍人」として将校団との伝統的に親密な絆を操作し、彼の最も忠実な支持者を戦略的な地位に置くために昇進制度を利用し、政府予算の最大の分け前を軍に与えることによって、敵対者とその盟友の連合私兵の成長を抑える個人的統制手段を作りだすことができた。

「独裁制の接近」に関し定期的に警告を発したにもかかわらず、野党エリートの大部分は相変らずの手法で政治を実行し続けていた。1971年8月の政治集会中の野党自由党指導部への爆弾投擲事件及びそれに続くマルコスによる人身保護令状の停止は、野党を動揺させた。だがたとえどのような恐怖を彼らが抱いたにせよそれは、合衆国は自ら設計した「民主的移植物」の破壊を容認しないだろうという信頼感によって、追い払われた。アキノは「射手座作戦」という暗号名の、軍部の支持を得た大統領のクーデターを警告していた。と同時に熱意をこめてこう予言した。「私は1973年に大統領になるだろう。」

1972年9月22日にマルコスが行った戒厳令の賦課は、瀕死のエリート統制システムへの止めの一撃だった。しかし階級支配システムにおけるこの歴史的転換のより大きな意義は、それを単に腹黒い個人的野心から生じた一種の逸脱現象であると解釈した野党エリートの、気付くところとならなかった。戒厳令宣言は実際には、自分たちの行動がより大きな当為命題と一致しているとも感じている人々の強い個人的野心を通じて、歴史的必然性が自ら働く方法の、きわめて興味深い一実例である。マルコス独裁制の到来は基本的に、新植民地支配制への致命的な脅威の出現に対する一つの階級対応であった。それは本質的に、1960年代後期と1970年代初期を特色づけたフィリピン人大衆の激化する社会的不満に対抗して、支配階級のかつての相対的に分散した権力を「集中化して再展開する試み」であった。

1950年代初期にCIAの後援を得たマグサイサイ政府によって農民を基盤とする共産主義者の反乱が敗北させられると、急進的な政治によって導かれた大衆の不満は、フィリピン型マッカー

ンズムがこの国をおおうにつれて10年以上も沈黙させられた。1960年代の半ばまでにはしかしながら、東南アジアで最悪の社会的不平等を有する社会の抑え切れない諸矛盾がマッカーシー主義者の上部構造を打ち砕き、1970年代初頭までにこの国は、土地改革を要求する農民の行進、戦闘的な労働者のストライキ、基本的改革・アメリカ企業の特権の終了・合衆国軍事基地の自国からの撤退を要求する力強い学生の示威運動によって、破滅状態となっていた。

憲法上保障された正式の諸権利が要するに、反エリート・反合衆国の諸要求を推進させるために大衆運動によって訴求されていた。そして階級意識・民族主義意識が広まるにつれて、恩顧政治を通じて大衆の諸要求を汲み入れ、断片化し、骨抜きにするエリート民主制の能力が、急速に腐食し始めた。大衆の発奮が、1970年に憲法制定会議の召集を余儀なくさせ、その会議には、社会的平等を促進しフィリピン人に国民経済のコントロールを回復させることを基礎とする憲法を起草するために、多くの人民代表が選出された。そして大衆の圧力が最高裁をして1972年に、数多くの合衆国企業の特権を終了させる一連の有意義な判決を出させた時、フランケンシュタインの創造物のように、形式的民主制が当初はそれに役立つことを目途としていた利害関係者の統制から、離れつつあることが明らかになった。

マルコス<sup>4)</sup>は、街頭で萌芽しつつある運動の示すエリート支配への深刻な挑戦を十分理解して、支配階級の懸念を、絶対的権力をものにしたいという彼の個人的な衝動とうまく接合させた。また合衆国が妨害することはないだろうと、正しく計算した。事実、戒厳令の初期に100%以上も軍事援助を増加させて、マルコスの新権威主義秩序を強固にする資金を与えたのは合衆国であった。ニクソン政府が実際にとった政策は、国家外交の技巧にわずらわされることなく合衆国企業の利益を安全にすることだったが、それはマルコスあての一電報の中で明白に述べられていた。――

アメリカ商業会議所は、フィリピン人民と国家の平和と秩序・企業の信頼・経済成長及び福祉を回復させるというあなたの御努力が、全て成功することを祈ります。これらの目標を達成する際、あなたを信頼して協力することを保障します。我々が合衆国において同僚であり会友であるとの感情を抱いていることを、お伝え致します<sup>4)</sup>。

これは、合衆国が自ら後援した形式的民主制の破壊を容認しないだろうということを一つの信条としていた、アキノや野党エリートのその他のメンバーを呆然とさせた背信行為だった。しかし彼らはシステムに与えた内部緊張の重大さを過小評価していたために、合衆国が新植民地的統制の一手段としての「エリート民主主義」にどの程度幻滅するようになったかを、気付かなかったのである。

戦後初期の東西間のイデオロギー戦争の文脈において、地主＝買 弁 <sup>コンブラドル</sup> エリートたちの安定した社会的指導権に基づく形式的立憲制度は、新植民地的支配にとって好ましい形態であった。フィリピンの政治制度は、アメリカ人が英仏の旧植民地帝国を解体しつつあった当時、第三世界の至る所で再現しようとした一つのモデルを与えるものだった。ワシントンが標的にした国の一つがヴェトナムであり、1950年代半ばにフィリピン型民主主義を作り出そうとしてそこに、ラモン・マグサイサイの顧問ランズデール大佐と彼のフィリピン人部下を配置した。

1963年 CIA は彼らの従者たるゴ・ディン・ジエム (Ngo Dinh Diem) の暗殺とその代わりに軍人の補充を指示したが、それはエリート民主制が、戦後フィリピンよりも一層高いレベルの階

4) Sam Bayani, 'What's Happening in the Philippines?', *Far Eastern Reporter*, November 1976, p. 26. で引用。

級的民族主義的意識と政治組織の存在により特色づけられる東アジア諸国を安定化させえないことの告白だった。その間、ラテン・アメリカの伝統的な寡頭制的民主主義をチリのキリスト教民主主義者のような中産階級政治エリートの参加にまで開放することによって、キューバ革命からの衝撃波に対抗しようとケネディ政府は努力していた。しかしそれも、選挙の舞台における前例のない組織化の好機を、左翼に与える結果となっただけだった。1964年のブラジルで民衆派のゴラル（Goulart）政府を追放した軍事クーデターに対する合衆国の支持、1965年人民に選出されたジュアン・ボッシュ（Juan Bosch）の政権復帰を妨げたドミニカ共和国でのその直接干渉はいずれも、形式的民主制の安定化効果に関する同様なアメリカ人の幻滅を示すものであった。その後悪夢が現実となった——即ち1970年のチリにおいて、この制度は親社会主義政府の権力への上昇を容認した。合衆国はその後、かつて1950年代に第三世界のためのモデルとしてそのイデオログたちが賞讃した当該政府の解体の背後に——直接扇動はしないにしても——決定的な位置を占めていた。——それは、1972年のフィリピン（「アジア民主主義の陳列棚」）、1973年のチリ（「南アメリカの英国」）、1974年のウルグァイ（「第三世界のスイス」）であった。

1960年代半ばにブラジルに出現した体制は、先鋭化した階級紛争状況への対応としてアメリカ人が熱心に求めていたところの、新形態のエリートによる新植民地的統制の原型を与えるものであった——それは、大規模な抑圧を通じて下層階級を非政治化し、「輸出志向型工業化」経由の経済成長計画を通じて中産階級・農工業のエリート・外国資本間に一つの社会的合意を形成することを試みる、軍部＝テクノクラートの政治指導部である。

しかしアキノや第三世界のその他のブルジョア民主主義者が、合衆国の意図を計算違いしたことはほとんど非難できないことだった。なぜなら外交政策当局者が、宣教師の民主主義という時代遅れのイデオロギーを通じて合衆国の帝国主義的存在を正統化し続けていたためである。しかしながら、新権威主義的秩序を学説上正当化する開拓的試みが、1968年にサミュエル・ハンティントン（Samuel Huntington）の『変革期社会の政治秩序』（*Political Order in Changing Societies*）によって与えられ、これは国務省の新世代官僚にとってのハンドブックとなった。ハーヴァードの教授は、「混沌とした」第三世界では強力な中央集権化された権威の建設が必ず民主的代表的問題に先行しなければならないと、論じた。これは権威主義の長所の理論的正当化過程の第一段階であり、10年以上後に「カークパトリック原則」<sup>5)</sup>に帰結することになる。

### アキノと新秩序

ハンティントンは国務省官僚だけでなく、ある種のイデオロギーを探索していたマルコスの宣伝者たちによっても、熱心な奪い合いの対象となった。ハンティントンの「秩序が最初であり代表はその後である」という言葉は、フィリピンの舞台においては「立憲的権威主義」という表現に翻案された<sup>5)</sup>。そして強力な権威と並んで伝統的な民主的権利の喪失こそが、輸出志向路線に沿って国民経済を発展させようと熱心にまた邪魔されずに努力をする上での一つの前提条件であると、マルコスのイデオログたちは付け加えた。

「権威主義の開発」と「民主主義の回復」間の論争は、戒厳令体制がその初期に僅かに生き残った政治討論をどの位認めたかについての指標となった。この時の状況は、投獄されたアキノの

5) ハンティントンは、影響を与えた本 *Liberty and Government in the New Society*, Manila: 1973. を書いたマルコス政府の教育長官オノフレ・コルプス (Onofre Corpuz) により、フィリピンで著名となった。また見よ Ferdinand Marcos, *The Third World Alternative*, Manila: Ministry of Public Information, 1980.

姿において支配階級の最良の伝統を明らかにしたが、彼はマルコスとの和解を断固拒否し、独裁者が不快感を示しても、1977年に手続無視の裁判所が下した「殺人」と「政府転覆」を理由とする死刑判決を歯牙にもかけなかった。事実この時期フィリピンの支配エリートが、大衆の間で正統性をほとんど享受しなかった理由は大旨、戦うニノイにあった。1975年の英雄的な36日間のハンストを含めて、彼は非暴力の方法でゴリアテをとどめている若々しい無防備のダビデというイメージを上手に活用した。

しかしながらアキノの民主主義擁護の立場は、エリートからの賞賛を引き出したかもしれないが彼の階級の大部分の者の支持は得なかった。マルコスは、フィリピンの全国・地域・地方のエリートたちの大多数は説得されてあるいは強制されて自分の側につくだろうと、正確に計算した。ニノイ及び元上院議員のホセ・ジョクノ (Jose Diokno)、ロレンソ・タニャーダ (Lorenzo Tanada)、ゲリー・ロハス (Gerry Roxas) のような全国的に著名な政治家たちの勇敢な一団は、口やかましい批判家集団であった。だが彼らの武装集団がマルコスにより武装解除されあるいは支持者たちが買収されると、自由党の盟友はすべてのレベルで彼らをハエのように見捨てた。優柔不断の態度をとっていたごく一部の者にとっては、アキノの故郷の州タルラックでの彼の政治機構の解体が一つの実物教訓を与えたが、それは主要な指導者たちが威嚇され、投獄され、地下活動を強制され、あるいは単に殺害されることを伴ったものだった。

マルコスは新旧のエリートの支持者たちを新しい党＝新社会運動 (KBL) に結集させる一方で、彼らと文民行政官の代わりに地域と地方の両レベルにおける主要な政策決定者として軍将校を配置した。この新しい政治の現実には、世界銀行のある報告書で鋭く要約されている。――

軍司令官たちは現代フィリピン史上初めて、特に州行政において、また司法・行政事項における (公的私的な) 影響力を通じて、権力構造の不可欠の一部となっている<sup>6)</sup>。

全国レベルでは将軍たちは体制内部の支柱を構成する二つの他の集団と、権力を共有し相互に浸透しあっていた――その一つは「<sup>バイアラット</sup>略奪資本主義」の手法を通じて基幹経済部門を統制下におくことのできた、マルコスの有力な実業家仲間であり、もう一つは世界銀行の指令と資金供与を受けて権威主義的近代化計画を実施する責任を負わされた、合衆国後援のテクノクラートである。

政治批判の非合法化とエリート野党の粉碎の結果、大衆の異議の帰趨はマルコスの<sup>ジャガーノート</sup>絶対的な力に抵抗しうる唯一の勢力――左翼――へと向った。そして10年の経過と共に、フィリピン社会の政治闘争の基軸は堅固に武装した支配階級と武装左翼の間のそれとなった。

### マルコス・アキノ・左翼からの挑戦

1950年代初期の士気を喪失し敗北した一団から、1970年代後期の不屈で反発力があり膨張を続ける運動体に至るフィリピン左翼の変貌を理解するためには、1960年代後期にその隊列の中で起きた劇的な分裂を簡単に述べておく必要がある。

マグサイサイと CIA から受けた大敗北の後、方向を見失い多くが殺害された指導部は、1956年のソ連共産党大会の結論と一致する路線の「議会に抛る社会主義への道」を採用した。1960年代半ばまでにはしかしながら、この平和主義的な道は、再生した民族主義的学生運動から現われ

6) World Bank, 'Political and Administrative Bases for Economic Policy in the Philippines', Memorandum from William Ascher to Larry Hinkle, Washington, DC, 1980, p. 6. この「政治的危険度」分析は「アッシャー・メモ」として、人々に知られるようになった。



てきた輝かしいホセ・マリア・シソン (José Maria Sison) に指導された新世代の急進派から、手厳しい攻撃を受けるようになっていた。これらの分子が党に加わるにつれて、旧指導部が支持する「平和主義的な道」と若い反対分子が提案する「持久人民戦争」戦略との間に、猛烈な党内闘争が噴出した。

旧指導部の発揮した幹部への支配力をゆるめることができなかった反対分子は、1968年12月にフィリピン共産党を「再建」し、1969年3月に68名と35挺のライフル銃で新人民軍 (NPA) を創設した。「誤りを正し党を再建せよ」と題する創設文書は、<sup>ボレイック</sup>フク団の反乱の敗北を主として外部要因ではなく内部要因にたどっている、注意深く論じられた論争文であった——即ちそれは急速な武装蜂起という冒険主義的軍事戦略、統一戦線に関する一貫した政策の欠如、更に幹部と大衆基盤の徹底的な政治的・イデオロギー的訓練の不在を指摘している。それは次に革命戦略をこう描いていた：フィリピン革命の現段階の特徴は「民族的民主的」なものであり——つまり反封建的・反帝国主義的であり——、それは農民から「民族ブルジョアジー」に及ぶ大部分の階級に対し潜在的にアピールできることを意味し、彼らを引っ張って帝国主義とその地方基盤たる地主＝買弁エリートに対抗させるものである。革命の主要な手段は「持久人民戦争」であり、そこにおける主要勢力たる農民は革命の最終段階において帝国主義の都市部の要塞を漸次包囲し解放するために、動員され武装されることになる。武装闘争の補完物として統一戦線戦術の柔軟な適用があり、それはできる限り多くの同盟者を獲得し、主要な敵を孤立させ、敵の潜在的な同盟者を中立化させることを意図するものである。反対分子の指導部は要するに、中国とヴェトナムにおける民族解放闘争の教訓をフィリピンの舞台に適用しようとしていた。革命戦略がフィリピンに特有の特徴を獲得するに至るのは、1970年代の半ばに入ってからであった<sup>7)</sup>。

1968年12月から1972年9月の3年半は左翼に対して、抑圧的国家の軍事力の全力攻勢の矢面に立つ必要のないまま大衆基盤を作り上げる貴重な機会を与えた。フィリピンの農民を革命のため動員する機が熟しているという NPA の評価は、ルソン島北部のカガヤン (Cagayan) 渓谷における基地地帯の急速な建設によって証明された。マニラでの学生騒乱の急進化もまた共産党と NPA に何百人もの新たな幹部を提供することになり、その多くは NPA の拡張工作のため農村部に展開させられた。

戒厳令の初期は再生したフィリピン左翼の「英雄時代」だった。その都市部における大衆組織は戒厳令の当初に粉碎され、他方 NPA はいくつかの反乱鎮圧の大作戦の標的となった。しかし左翼は1977年までにはよく盛り返していた。1970年代半ばに党がとった二つの重大措置がその理由を説明してくれる。その一つは1950年代のフク団のように一つの主要基地に頼るのではなく、11の主な島の各々に多数の基地地帯を大胆に作るという決定だった。もう一つは、農民・労働者階級以外の社会集団に対しても民族主義的な民主化プログラムの呼びかけを広げるために、教条主義的で「極左的な」組織化の方法を矯正することであった。

今日では古典となった二つの文書『我々の人民戦争の特徴点』と『我々の緊急の課題』に述べられているように、この二つの政策は1980年代の初めまでには立派に結実していた。この国の72の州のうち56で、約1万人の NPA 正規兵——その一部は中隊規模の部隊である——が、マルコ

7) フィリピンの「新左翼」戦略を発展させた主な著作は、年代順に以下のものがある。Jose Maria Sison の1964—1968年の演説集の 'Struggle for National Democracy', 共産党の「再建」文書の 'Rectify Errors and Rebuild the Party' (1968), シソンの仮名といわれるアマド・ゲレロ (Amado Guerrero) によるフィリピン史の秀れた再解釈である 'Philippine Society and Revolution' (1970), ゲレロの 'Specific Characteristics of Our People's War' (1974), それに共産党の 'Our Urgent Tasks' (1976)。

スの25万人の軍を危険なほど手薄に展開させていた。都市部では巧みな組織化によって、労働者・学生・一定の専門職業家部門・カトリック聖職者間に、非合法・半合法それに合法組織の横断的な諸階層が作り出されていた。民族民主戦線（NDF）——その準備委員会は1973年に発足——が、この10年の終わりまでに一つの重要な政治的実在物となっていた。NDF は大体、群島中で4万人の活動中の組織者と約600万のフィリピン人の大衆基盤を有していると、教会筋では見積っていた。

マルコスに対する民衆の反対の先頭に拡大を続ける NDF が出現したことは、合衆国と野党のエリートにとって、大きな心配の種だった。1982年初めにフィリピン第2の島ミンダナオにおける政治情勢を3カ月調査した後に、合衆国の一領事は当時の国務長官アレクサンダー・ヘイグ（Alexander Haig）に、いくつかの地域では NPA が「地方政府機構よりも一層重要に」なっていると打電した。彼はこう結論づけた——「これは最悪事例のシナリオのように思われるかもしれませんが、現在の事情は希望を与えるものではなく、将来は不吉です。」<sup>8)</sup> 同様な懸念が東アジア担当国務次官補ポール・ヴォルフウィッツ（Paul Wolfowitz）により、アメリカ議会での証言で強調された——「……共産主義者の新人民軍の反乱の増大する挑戦は……野放しのままにしておく、ついには合衆国軍事施設をおびやかすことになるでしょう。」<sup>9)</sup>

NDF の挑戦は野党のエリートから異なった反応を引き出した。元上院議員ホセ・ジョクノとロレンソ・タニャーダは、二人とも長年の民族主義者として証明済みの指導的人物であったが、NDF シンパとして知られる諸組織と密接に協力することにより、エリート政治との断絶を成し遂げた。他方元大統領ディオスダド・マカパガル（Diosdado Macapagal）や自由党首ゲリー・ロハスのような著名人たちは反射的な反共主義を示し、「マルコスがこの国を共産主義者に追いやっている」との見解を声高に宣伝して、独裁者を見捨てるようにとカーター政府を説得することに努めた。

アキノの立場が最も複雑だった。彼は一方ではジョクノの頑固な民族主義者の立場に非常に懐疑的であって、「それでは我々の成功はおぼつかないだろう」と述べていた。他方で彼は、多くの同僚たちの反共姿勢を軽蔑していた。「私はこの人たちがわからない」と彼は国外追放中立腹して述べた。「我々はマルコスを打倒するという目標において一つに結ばれています。そして共産主義者との相違点を持っています。だがマルコスがいなくなった時に初めて彼らの心配をすれば良いのです。」

民衆政治家ニノイは、「共産主義者と一緒に仕事をすることができる」人物として、常に自分を誇りとしていた。戒厳令以前にアキノは、タルラックで活動中の新人民軍部隊との暫定協定の達成に成功したと、報じられた。獄中において彼は、1977年に捕えられた有名な共産党議長ホセ・マリマ・シソンの諸権利の保護を要求した。またある殺人罪で、アキノをトップの NPA 指導者であるベルナーベ・ブスカイノ（Bernabe Buscayno）やヴィクター・コルプス（Victor Corpuz）に結びつけようとの試みがマルコスによってなされたが、三人の誰もがお互いに対して不利なことを述べなかったため、失敗に終わったことがあった。それは用心深いながらもお互いの尊敬を引き出した、一つの経験だった。

アキノは左翼を中立化させるために、それを選挙過程の中に引き込むという戦略を提案した。

8) (フィリピン) セブの合衆国領事シャインバウム (G. S. Sheinbaum) からアレクサンダー・ヘイグ国務長官あての秘密電文 (1982年4月13日付)。

9) *Asia Record*, April 1983, p. 2. で引用。

「彼らは選挙に参加する権利を持たなければならない、思想の市場で競争しなければならない」と彼は主張した。「もしも彼らがその後暴力に訴えるならば、話は別になるが。」<sup>10)</sup> ニノイがアメリカの支持を確保するために投げかけていたのは、左翼との競争に成功しながら左翼と意思疎通のできる人物であるとのイメージだった。

### 国外追放者の欲求不満

しかしながらそれは合衆国が買い付けることのないしろものだった。ジミー・カーターの国務省は当初マルコス体制の抑圧的な記録に批判的であり、またその「人権政策」が最初はエリート野党の希望を元気づけもしたが、1979年までに民主党政府はフィリピンの強者と和解するに至っていた。それは、マルコスが野党のエリートの権力基盤を余りに効果的に減ぼしたために、彼が左翼に対抗する唯一の効果的な防護物になってしまったという認識から生じた和解だった。

フィリピンにおける二つの巨大な軍事基地、スービック海軍基地とクラーク空軍基地の安全な保有権の見返りとして、合衆国は5億ドルの軍事並びに軍事関連援助をマルコスに与えることに同意した。しかしながら、エリート野党の希望に対するその打撃を緩和するために、カーター政府はアキノの釈放を強く求めた。

1980年5月に絶好の機会が到来した。この時アキノはフィリピンでは行ふことのできない三つの導管をつける心臓外科手術を受ける必要があることが発見された。カーターにとってこれは、イランと同じくフィリピンを彼の「人権政策」の例外としていると非難する批判者たちを黙らせることができ、また彼もそれを望んだ、恰好の宣伝行為<sup>ジェスチュア</sup>だった。マルコスにとって、アキノの釈放の決定は行ふ価値のある博打<sup>ギャンブル</sup>だった——追放されたアキノはしばらく波風を立てるかもしれない、だが独裁者は評判の高い人気者の敵を獄中にとどめておくという煩わしさを免れることになる。一度出国すればアキノは背景に退くだろうと、マルコスは計算した。

それは狡猾なマルコスが勝った博打だった。アキノは、合衆国のマルコスへの支持を終わらせるために、ワシントンでより効果的にロビー活動ができるだろうと望みを持ち、申し出を受け入れた。彼はCIAや国務省のような機関との長い結びつきを当てにした。しかし合衆国に到着してみると、イランのシャヤやニカラグアのソモサという強固な親米体制を掘りくずしたもののこそ合衆国からの自由主義化の圧力だったという非難を再生した右翼から浴びせられて、ワシントンが守勢になっていることを、ニノイは発見した<sup>11)</sup>。彼がそれを知って狼狽したことには、カーター政府は実際にマルコス体制の中に彼を推挙することさえ試みていた——リチャード・ホルブルック (Richard Holbrooke) 国務次官補は、マルコスが大統領に留まる一方でこの国の首相の地位を提供する案を示した。彼は怒って拒絶した<sup>12)</sup>。

アキノはその後、マルコスがそうするだろうと予言した通りに行動した。彼は体制を声高く批判する合衆国内の遊説旅行に出発した。その後1980年の夏、マニラにおける彼の支持者たちは、イラン流の都市部の不安定イメージを作り出すことによりカーターをおどしてマルコスから引き離すことを狙って、政府のビルやマルコスの関係事業所への一連の爆弾事件に参加した。これらの行動は、その個人的自由もまた個人的安全も保証することを拒否することにより、アキノの婦

10) 1981年2月20日、ニュージャージー州プリンストンのプリンストン大学での談話。

11) 保守派の攻撃の主要なものは、ジーン・カークパトリック (Jeane Kirkpatrick) の 'Dictatorships and Double Standards', *Commentary*, July 1979, とロバート・タッカー (Robert Tucker) の 'America in Decline: the foreign policy of maturity', *Foreign Affairs*, Winter 1980-81. であった。

12) 'The Philippines: the more things change……', p. 16.

国を永久に禁止するための絶好の口実を独裁者に与えた。

フィリピンから去ったことで再度「悪の天才」に戦術上出し抜かれることを許したのだということが、ニノイには段々とわかってきた。彼がハーヴァード大学国際問題研究所の客員研究員として落ち着いた数カ月後には、名声は先細りとなった。そして1981年1月にレーガン政府が就任した時、国外追放の政治は失敗した運動だったことを彼は了解した。

新政府は極端にマルコスを抱擁し、副大統領のジョージ・ブッシュ (George Bush) が独裁者のためにこう乾杯をしたほどだった——「我々は閣下を愛しております……民主的権利と民主的過程への閣下の忠実さを愛しております。」ブッシュの大げさな言葉は、第三世界における権威主義を尊敬できるものにし、さらに進歩のためのケネディ派連合の政策を再生させようとするカーター政府の安定破壊の試みだと後になって見なされた、宣教師の民主主義という時代遅れのイデオロギーを最終的に葬るための、一つの教義に基づく努力と平行するものであった。外交政策における新右翼的思考法の最有能の代表者は合衆国国連大使のジーン・カークパトリックであり、彼女はこう論じた。——

……トップの人物の権力と地位が侵食されあるいは排除される時には、権威の織物はすばやくほどけてしまう。より長く専政者が権力を握るほど、またより一層個人的影響力が浸透するほど、一国の諸制度は一層彼に依存することになる。彼を失えば、要石を取り除かれたアーチのように社会の組織化された生活は崩壊するだろう<sup>13)</sup>。

「まあ彼らのレトリックはついに実践の域に達してきたと思います」と、カークパトリックの議論を続んだ後でアキノは苦笑してコメントした。「テロリズムを輸出している」とのマルコスの申し立てで FBI に取り調べられ、海外旅行から戻る度に入国審査官に悩まされて、アキノは十分国外追放者の境遇を味わっていた。1981年の半ば、ニノイは追放中の反対派の人々に別れの挨拶をしたが、その結果はマルコスから「安全通行」券を得ることに失敗して、東京からおずおずと戻ってきただけであった。1982年初め、マルコスの健康悪化のニュースが届いたが、それはもう一度アキノを時に躁状態になるほど元気づけた。彼は誰に対してもこう予言した——「1982年は私たちが皆でフィリピンに帰ることになる年です。」しかしマルコスが合衆国への公式訪問を終えた後の1982年末になっても、ニノイは「私たちのアメリカの牢獄」と自称したものの中で依然苛立っていた。

1983年の半ばまでには、アキノの政治的将来は深刻な困難に陥っていた。エリートの野党における彼の主要な役割は、元上院議員のホセ・ジョクノと市長の「ネネ」ピメンタル ('Nene' Pimental) (sic) という二人の人物によって、着実に奪われていた。民衆的でもカリスマ的でもなかったが、ジョクノは断固とした民族主義的立場と仮借のない体制批判の点で、またとりわけ政治囚の諸権利の精力的な弁護活動の点で、国内的にもまた国際的にも広汎な名声を勝ち得ていた。ピメンタルはアキノ型の民衆的・カリスマ的政治家であって、彼をカガヤン・デ・オロ (Cagayan de Oro) 市長の地位から追放しようとしたマルコスの努力を阻止するのに成功した時、全国的注意を集めた。1983年初めマルコスは、NPA へ援助を寄せたかどで彼を投獄したが、それは計らずもピメンタルを国民的英雄に変えてしまうことになった。

自らの政治的将来についてのアキノの関心は、しかしながらもっと大きな心配と交差していた——それは、フィリピン人民の左翼へと向かう急速な運動が後戻り不能点に近づきつつあるとい

13) Kirkpatrick, *op. cit.*, p. 37.

うことだった。彼の恐れはアメリカのプレスにおいて NPA の報道範囲が増大したため強められたが、プレスはその他の点では静かな東南アジアで唯一成長しつつあるゲリラの反乱を指導するものとして、フィリピン左翼を描いていた。この運動はマルコスだけでなく、アキノが支配階級政治家として根本のところで結ばれているエリート・コントロールの全システムをも、一掃するおそれを持つものだった。

彼は実際、左翼の立場の増大する人気に自らを適合させていることに気が付いた。例えば最初に合衆国に到着した時には、彼は合衆国の基地を「ソ連に対してこの地域を保護する」ために必要なものとして擁護した。だが出発前には基地の「最終的撤退」に、しぶしぶながらも賛成していた。しかしながら最後まで彼は、反帝国主義の立場は道を誤らせると信じていた。彼はこう述べた。「私たちはフィリピンに対する合衆国の影響を過大評価しているのです。私たちはニンジンと鞭を使えば合衆国をうまく扱うことができます。多国籍企業とももっと平等な関係に達することができます。私たちが必要なのはもっと政治的意志を持つことであり、レトリックは少なくて良いのです。」

映画『ガンディー』は勇気以外の武器を全て奪われた一政治人に、強い衝撃を与えた。非暴力行動は、特にそれが西洋のプレスにより報道されるならば、彼自身の方へ、マルコスと NPA の両者に代わりうる彼の政治的選択肢の方へと、国際的・国内的注意を引くだろう。1983年6月までにアキノは決心していた。「今や後戻りすることはない」と、彼はきっぱりと主張した。そして合衆国議会のアジア太平洋問題小委員会への劇的な別れの言葉の中で、手遅れにならない前に「立憲的民主主義への復帰に関してマルコスと二人だけの交渉を強く求める」ことが、自分の使命であると述べた。

アキノはもちろん、身体の安全に重大な危険があることに気付いていた。しかし理性的な政治家としてマルコスのとりうる対応を計算すると、独裁者には三つの選択肢しかないとアキノは確信していた：

——単に入国を拒否し、彼を合衆国に送り返すことができるだろう。この場合アキノは、大きな宣伝上の勝利を与えられよう。

——アキノを再投獄し、彼を処刑するために「合法的」訴訟手続を再開することができるだろう。これはアキノを中央舞台に戻すだけでなく、以前のように国際的評判となり、マルコスが死の脅迫を実行することを政治的に不可能にしよう。

——自由に入国することをアキノに許し、その後「クリーンな」方法で彼を暗殺させる適当な機会を待つことができるだろう。しかしながら、自由に動き回る時間があればあるほど、暗殺の試みを防ぐ政治的・個人的防御を一層築くことができるだろうと、ニノイは考えた。

アキノにとって理想的シナリオは——彼はそれを首尾良くやり遂げる五分五分のチャンスがあると思っていたが——最後のものだった。彼は到着後直ちに空港で待つ支持者を率いて、空港から下町のマニラにある大統領官邸まで10マイルの行進をするつもりだった。「『私たちがマラカニャン[宮殿]に到達するまでには、その数は2万人になるでしょう』と、彼は合衆国からの出発前に深く考えて述べた。」<sup>14)</sup>それはまさに『ガンディー』の中の光景だった。

### 非理性的な選択がなされる

それはマルコスとの戦いにおけるアキノの三回目の大誤算であり、今回は致命的だった。ニノ

14) 東南アジア資料センターの会員ジョエル・ロカモラ (Joel Rocamora) と1983年8月4日に行ったインタビュー。

イの誤りは、情勢について適度の統制力を持つ理性的政治家として、マルコスを判断したことにある。1983年8月にはいずれの条件も存続していなかった。

事態は病気に苛まれた独裁者の統制から離れつつあった。この状況を最も深刻に示すものが、マルコス連合体の二大派閥間の王座の継承をめぐる激しい戦いであった。大統領の強力な妻イメルダ・マルコス (Imelda Marcos) と陸軍参謀総長ファビアン・ヴェール (Fabian Ver) の率いる宮廷の一派が、国防長官ジュアン・ポンス・エンリレ (Juan Ponce Enrile) 及びたまたまアキノの妻コリー (Cory) の実いここにあたるエドゥアルド・コンジュアンコ (Eduardo Conjuangco) の率いる一団と、対決していた。両陣営は軍内外において火力・支持者の点で大旨拮抗していた<sup>15)</sup>。

アキノの到来は、二集団間に確立されていた大まかな均衡状態を覆すおそれがあった。というのはニノイの草の根政治機構は体制の手で解体されたかもしれないが、体制側では民衆のカリスマを通じて人民を動員する彼の能力への健全な尊敬の念を、失っていなかったからである。アキノは要するに、王位継承過程において「乱暴者」として行動し、独裁者が好意を寄せていたイメルダ=ヴェール派に不利に釣合いを傾けることができたのである。

アキノはまた、マルコスがライバルの到着に対する対応を計算するために用いるであろう理性的な政治的徴積分学の範囲を過大評価するという、誤りをおかした。マルコスに近い観察者たちは、計算づくのマキャベリ主義的政治家の極致たるこの独裁者が、苦々しい個人的な敵にかかわる問題で政治的判断を下す時には、何回か「冷静さを失う」ことがあったと述べている。

ニノイは単なる苦々しい個人的なまた政治的な敵ではなかった。彼 (独裁者) は彼自身大いなるネメシス (復讐の女神) だった、独裁者が1980年にアキノを釈放した時暗黙の協定と見なしていたこと——つまりアキノがもし海外でマルコスを批判するようなことがあれば、帰国の許可は期待できないということ——を、この人物アキノは無視していた。しかも彼マルコスは墓に入りかけているのに、ニノイは完全な健康体で帰国するところだった。マルコス以後をめぐる騒然とした継承問題の危機の中で、この憎むべき敵はなお勝利をつかむことができ、彼が17年もかかって作り上げた帝国を自分のものと主張することができたのだ！

マルコスをして瀬戸際に追いやりアキノの暗殺を命令する気にさせたものこそ、おそらくは、辛辣な個人的・政治的敵意と定まらない継承問題の危機との、この危険な交差であったのだろう——これこそ、独裁者がいかにしっかりと大小の決定を統制しているかを知っている、大部分のフィリピン人の到達した結論である。

### 中産階級の高揚

しかしアキノの場合、戦闘には敗れ——しかも自らの生命を失ったが——戦争には勝った。なぜなら、マニラ国際空港の空港ランプでの信じられない処刑が、都市部マニラという社会的火口箱を爆発させる火花となったからである。殺害は、この都市の多くのホワイトカラー・官僚中間層・また事業家のエリートたちを、体制に対する積極的な反対に向かって押し進めるという結果をもたらした。

この事態の展開の意義を十分に把握するためには、戒厳令の当初から引き続き体制側が、中産階級を支持基盤として絶えず育成してきたことを理解する必要がある。マルコスは「旧社会」の

15) 暗殺に関するこの戦いの意義について、見よ Alfred McCoy, 'A Political Death in Imelda's Territory', *Sydney Morning Herald*, 23 August 1983.

「混乱」と「無法状態」を追い払う強力な権威像を投影して、この伝統的に移り気な階級の——政治的・経済的安定への切望——という一側面にアピールすることをねらった。戒厳令以前に、「規律のない人々に規律を与える」馬上の人という思想はこの階級の中に広く行き渡っていた。そしてそれは奇妙なことに、社会を本当に民主化したいという対照的な切望とも共存していた。政治的権利の喪失についての中産階級の関心を沈静化するためマルコス、経済的繁栄の成否はこれら諸権利の一時的停止にかかっており、これら諸権利の「乱用的」行使こそが「民主的な行き詰まり状態」を導いたのだと、主張した。

1974年マルコスが土地改革計画を停止したのは農村の中間層を自分の側にとどめておくためであり、その頃には土地改革担当者たちは、中間土地所有者の圧倒的多数を構成する学校教師・事務員・退職官吏・小商人から大きな抵抗に会っていた<sup>16)</sup>。他方都市中産階級は、大量の外国資本の導入に基づく経済発展計画によって社会的流動性のための機会が開かれるだろうと、確信させられた。中産階級の繁栄は、マルコスのPR係たちが「中央からの革命」と呼んだものの約束事だった。

それはしばらくの間……働いた方式だった。マルコスに疑念を持ちイメルダの贅沢な暮らしぶりに憤慨しながらも、中産階級はそれでも、年6%の経済成長を維持する一方で、中産階級心理の大きな悩みの種であるインフレを我慢できる限界内におさえておくという政策によって、中和され静止状態にとどめられた。それはブラジル型の非政治化の手法であった——中間層は自らの生活水準が上昇していると感じている限り、農民・労働者・都市貧民間の生活水準の下落には目をつぶるのである。

1979年になると、対外的景気の後退・誤った経営と腐敗・開発の犠牲者からの抵抗の増大が結びついて、輸出志向の外国資本依存型の経済戦略が崩壊し始めた。この崩壊は、上昇する失業によりその地位がひどく打撃を受け、また世界銀行=IMFの課したペソの切り下げから生じたインフレの圧力によって財布が薄くなった、中間層の離反を引き起こした。

「中央からの革命」の約束事と陰うつな結果の間の食い違いから生まれた苦々しい感情が、当初のレトリックを信じていたと思われる中産階級の一知識人によって、このように表現されている。——

マルコスは中央からの革命に着手した。もしそれが実際に中央からの革命だったならば、生き残ったことであろう。数多くの人々を下から中産階級に引き上げたことだろう。また新社会においてこのような幅広い利害関係者の横帯が生まれ、その堅固な防御機構となったことだろう。だが実際にはそうはならなかった。*Anong lumitaw?* [何が出現したのか?] 新寡頭制である。だから革命は共産主義者たちを裏切ったように思われる<sup>17)</sup>。

アキノを勇気づけたのはこの幻滅の過程であり、いつの日にか権力につくという彼の希望は都市中産集団からの支持と密接な関係があった。「(政治的自由の喪失と経済的發展の間の)トレードオフはもはや働いていません」と、彼は主張した。「今や皆さんは政治的抑圧と経済的不況<sup>デプレッション</sup>の両方に直面しているのです。」<sup>18)</sup> また別の機会にこう言明した——「経済はマルコスのアキレスの踵です。」<sup>19)</sup>

16) これは、1977年12月にワシントンで行われた合衆国国際開発局主催の、マルコスの農業改革に関するセミナーの討論要約集、'Agrarian Reform in the Philippines'の結論である。特に12, 13頁を見よ。

17) *Who Magazine* (Manila), 2 November 1983. に引用の、マカティ実業家クラブ(MBC)の評議員ホセ・ロメロ(Jose Romero)の言葉。

18) 1983年5月10日、コネティカット州イエール大学での談話。

19) Robin Broad, 'Philippine Crisis Leaves Investors Wary', *Multinational Monitor*, November 1983, p. 6. で引用。

アキノはまたもう一つの展開——民族資本家階級のマルコスからの離反——によっても、意気が上がった。戒厳令の初期には、関税障壁を引き下げよという世界銀行＝IMFの圧力に抵抗することにより、独裁者は、保護された国内市場特権を享受するこれらの民族事業家を自分の側にとどめておこうとしていた。しかしながら多数国参加機関が1979年に保護廃止の最後通告を発するとマルコスはそれに従い、民族事業家を反対者側に追いやった。世界銀行の一報告書はその顧客に強制した状況を卒直にこう描いていた。——

保護関税と特別補助金の除去は、「近代的能率化」の標的とされた産業界の内部に、大きな不満をひきおこしている。従ってフィリピンでは、マルコスの個人的友人たちへの強く感じられる情実主義という付随的な要素がかなりの憤慨をひきおこしており、地方財界も現行政府の政策指令を弱めようとするいくつかの強い動機を持っている。』<sup>20)</sup>

マニラの実業家階級の他の二つの部門を促して、保護主義の除去によりおびやかされた民族事業家の側に加わらせたのも、この「個人的友人たちへの強く感じられる情実主義（の存在）」であった——その部門とは、合衆国の金融界としっかり結びついていた伝統的な地方金融エリートと、主要なアメリカ人の海外投資家であった。

地方金融エリート及び外国の投資家は、1970年代の初期に「健全なビジネスの環境」を確立するというマルコスを当初は支持したが、マルコスの親友たちが砂糖・ココナツ・建設・エネルギーのような基幹産業の支配権を手に入れることができた時点で、心配し始めた。これらコングロマリットの急速な膨張は国外・国内での信用取引を行うことによって補給された。この温室的借り入れが1981年に一大財政危機をもたらしした時、多額の負債を抱えたマルコスの友人たちは見捨てられまた破産させられて、彼らの事業のライバル間に安堵のため息をつかせた。

マルコスはしかしながら、親友たちの死を座視しなかった。彼は仲間のために6億米ドルの「救済基金」を設立するのを許すようにと、今や重い負債を抱えた体制に対する外国信用供与の最終決定者たる世界銀行とIMFを説得して、その後直ちに二つの機関と同意していた融資水準を突出させた。この救済 醜 行 は、金融エリートと外国の投資家間に残っていたどのような信頼をも打ち砕くものであった。

「政府がその情実主義という失敗した政策を放棄し、新しいカードの組と公平な持ち札を配り始める準備をしていることを、明白な言葉で示さない限りは、フィリピンはその経済問題を決して解決しないでしょう」と、外国資本と密接な結びつきをもつ金融エリートのある著名人は、体制に公然と警告した<sup>21)</sup>。また体制への外国投資家の幻滅感を反映して、多国籍企業のために働く指導的な「政治的危険度分析」会社の一つは、その顧客に対し「フィリピンにおいて長期の事業関与」をしないようにと警告した<sup>22)</sup>。その間に、この国の220億ドルの負債の大部分を支えている合衆国の大手民間銀行は、不安定性・抑制されない腐敗・さらに経済の停滞がフィリピンを一大信用危険国にすることを恐れて、ローン計画の思い切った規模縮小を行ったのである。

### 合衆国はその選択を検討している

アキノは、農民・労働者・都市貧民・聖職者・学生・教師や保健労働者のような一定の専門職業家部門間における民族民主戦線の影響力に対抗して、中産階級と実業家の連合体を作り出すこ

20) World Bank, *op. cit.*, p. 8.

21) Jaime Ongpin, Letter to the Editor, *Fortune*, 24 August 1981.

22) BERI, S. A., 'Force 83 Report on the Philippines', New York, 15 March 1983, p. 2.



とを望んだ。そして実際にそれこそ、彼の暗殺後自然発生的にまた突然に出現した勢力であった。

アキノ以後の動揺は二つの運動の合流によって生みだされている——即ちそれは新たに政治化されたホワイトカラーや中間官僚部門の自然発生的なうねりと、学生集団・下級聖職者・ある種の専門職業家層・都市貧民の組織化された部門の「自覚的な」対応である。NDF が後者のグループのために政治的指導部を提供しており、後者のグループはここ10年以上都市部での NDF の組織化工作の標的となってきた。他方で中産階級運動のイデオロギー的・政治的指導の方は、安定しないながらも、UNIDO（民主野党連合）に結集するエリートの野党派、率直なマニラ大司教のジャイメ・シン（Jaime Sin）枢機卿に指導される教会階層制内の中央勢力、それに億万長者の銀行家エンリケ・ソーベル（Enrique Zobel）の支配する地方金融エリートの手し、引き続きかかっているのである。この二つの運動は、二つの別個の地理上の本部まで持っている。マニラの豪華なマカティ金融地区における「山の手の」示威運動は常に、金融エリートと伝統的なエリート政治家によって率いられ、他方マニラ中央郵便局やその他の繁華街での「下町の」大衆行動は、NDF 勢力によって通常動員されあるいは強く影響を受けている。

二つの運動を結びつけているのは、殺された上院議員の妻コリー・アキノと、エリート政治と手を切ったがかつての同僚たちと共に大きな威信を持ち続けている二人の民族主義者、元上院議員のジョクノとタニャーダである。それは不安な連合である——数多くの機会に会社の取締役たちは、彼らの政治が急進派のそれと異なることを明らかにするために、親米のスローガンを叫ぶ示威運動を後援している。左翼は他方で、タニャーダやその他の「ブルジョア派」と協力して、正義・自由・民主主義を求める民族主義者連盟を設立し、「合衆国＝マルコス独裁制の解体……と真の民主的・代表的な制度に基礎を置く連立政府の創設」を求めている<sup>23)</sup>。しかし NDF はまた、運動を分裂させようとする合衆国の試みに対して、強い警告を発している。

さらに第三の行動主体が登場する。その動向がおそらく都市部の動揺を決定する要素となるだろう。これら二つの相対的に「自覚的な」また組織化された勢力の間に、マニラの巨大な都市部大衆の大多数が存在する——それは、生活と戦う下層中産階級部門たる事務員・小露店主・小運送業者、未組織労働者、都市の膨張するスラム街の未組織の住民たちである。この多くの「動員可能な」大衆は、8月末のアキノの葬儀に集まった500万人の行進者・会葬者の大部分を構成したのであり、深く反マルコスの感情を抱きながらも、それを決定的で持続した街路上の抗議へと動かしうる「政治の公式」を待ち続けている。これこそまさに、上層中産階級の野党と民族民主戦線が、独裁制に反対して広汎な統一を保持しながらも、手に入れようと現在静かに競争しているところの基盤である。これはその階級に基礎を置く計画と11年に及ぶ組織化経験とを持っている NDF が、勝利を確信していると思われる戦いである。しかし次のような一人の活発な中産階級指導者の言葉を見てみれば、鋭い競争が現にありまた今後も続くだろうということが理解できる。——

アヤラ [多くのデモの場所] で何がおこっているのだろうか。これらは活躍中の経営者である。彼らは1970年代の急進派であって、今では上着とネクタイを身に着けているが、依然としてより良い生活を望んでいるのだ。これは中央からの革命である。しかもこれら経営者たちはマカティ [ビジネス地区] だけでなく、政府の官僚機構の中にも見い出すことができる。JAJA（アキノ氏に正義を、すべての人に正義を＝訳注）、ATOM（8月21日運動＝訳注）のような運動やその他の集団が、経営者に指導されていることに注目しなさい。2万人・3万人・100万人の葬列を上演できる所では、経営と法人の戦術が働いている

23) Nationalist Alliance for Justice, Freedom, and Democracy, 'Primer,' Manila, 5 November 1983.

ことがわかるでしょう。それは抗議運動の背後にある経営の映像である。それは野党の指導部である<sup>24)</sup>。

合衆国はこの過程の無関心な観察者ではなかった。当初はかつての盟友の急速な政治的価値下落によって驚き度を失ったが、合衆国の外交政策当局はマルコス以後の移行期のための望ましい「シナリオ」を積極的に討議している。1982年のアキノ暗殺以前に、中央情報局はフィリピン問題の専門学者を集めて、マルコスに代わりうる可能な選択肢の作成を求めている。CIAの努力は暗殺後「機関相互間」の検討事項に拡大され、CIA・国務省・ベンダゴン・議会担当官たちがあわてふためいて「マルコス問題」の長時間会議に参加することになった。

その内部討議（の結果）は10月3日の新聞に打撃を与えた。この日レーガン大統領は11月のマニラ訪問の取り消しを決定した。ニューヨーク・タイムズ紙の論壇で、合衆国の元フィリピン大使でありCIA官僚でもあるウィリアム・サリヴァン(William Sullivan)は、合衆国が「いかなる混乱状態においても、フィリピンにおける平和的かつ民主的な移行を助けるため行動をとる」ことを勧告した<sup>25)</sup>。ウォール・ストリート・ジャーナル紙はサリヴァンの路線を攻撃して、こう述べた。「マルコス氏は戦うに値する敵を持っているだけではない。彼は、今では少なくとも自分に負けを宣するため、我々にはほとんど計りしれない技量で戦いをしているのだ<sup>26)</sup>。」

サリヴァンの提案はCIAと国務省の中堅レベルの専門家の賛成を得たと言われているが、これは合衆国下院が413対3のはっきりした票決で、「アキノの暗殺の徹底的な独立したまた公平な調査」と1984年5月に国民議会の「真正で自由なまた公正な選挙」とを求める決議を可決した時、大きな後援を受けた。

決議案の討議において決議案提案者のスティーヴン・ソラーツ(Steven Solarz)下院議員は、「憲法上の民主的な選択」のもつ反左翼的目的を次のように露骨に述べた。——

私はこれらの[1984年5月の]選挙は、フィリピン史における歴史的な分水界をたぶん構成するだろうと思います。そしてこの国で共産主義者の支配する新人民軍への支持が高まっている時に……これは、彼らの国で平和的な変化が可能であることをフィリピンの人々に示すための、たぶん最後の機会となるでしょう<sup>27)</sup>。

10月中旬までには、非常に大きな重要性を持つもう一つの勢力——マルコスの主要な国際的債権者——が、選挙の選択肢を支持する姿勢を示した。彼らはアキノの暗殺が引き起こした資本の大量逃避を心配したが、それは2カ月半の間で外国為替準備金を20億ドルから1月当りの輸入相当額よりも少ない4億3,500万ドルに減少させ、今では249億ドルにも達する負債を返済する体制の能力に損害を与えたのだった。政治改革が良好なビジネス環境を回復させるための不可欠の条件になったと、フィリピンの最大債権者たる国際借款団は体制側のニューヨーク代表者に語り、「政治的变化」が起きるまでに更にローンを与えることを拒否した<sup>28)</sup>。マニラでは、11年前には戒厳令を課したマルコスを最初に祝福した人々の一員だったアメリカ商業会議所が、今ではその他の実業家団体に加わって、「政治改革・民主的権利の回復・浸透する軍事化の終了」を要求した<sup>29)</sup>。

その提案者の観点からすれば、「平和的選挙の選択」は、野党を分裂させ民族民主戦線を孤立

24) *Who Magazine*, 2 November 1983. に引用のマカティ実業家クラブの評議員ホセ・ロメロの言葉。

25) *New York Times*, 3 October 1983.

26) *Wall Street Journal*, editorial, 6 October 1983.

27) *Congressional Record*, 24 October 1983, p. H8566.

28) 'Bankers Say Marcos Must Move', *New York Times*, 29 October 1983.

29) 'Marcos Blames Businessmen for Economic Crisis', *Washington Post*, 11 November 1983.

させるために、アキノのマントで身を包むチャンスを含衆国に与えるものである。都市中間層が「自由な選挙」によって正統化される政府の基盤を与えるであろう。ある種の国務省や CIA 官僚の意見では、伝統的なエリート野党の弱さのために、将校団の「専門家部門」を政府の支柱として役立てるよう選出さねばならないとされた——それは丁度、国際的銀行業界の信頼を依然享受しており、またこの国の莫大な負債を返済する保証としてその存在が役立っている、テクノクラートの現行集団が選出されたのと同様である<sup>30)</sup>。

しかしながら、このシナリオにはいくつかの手ごわい障害がある。

一つはホワイト・ハウスそれ自身である。レーガンと彼の信頼する顧問たちは CIA や国務省の専門家たちの助言を無視したりあるいは反対して、彼らの「尻ポケット」から外交政策を作成することで知られている。ホワイト・ハウスの第三世界向けの政策は、反射的な反共主義により、強権的で抑圧的な盟友への強い嗜好により、また自由主義化は革命に続く控えの間であるとの信念によって、引き続き特徴づけられている。このサークルの中では、エリート民主制は親米社会の安定化機構としては旧式である、またシャーとソモサの両者を覆したものがそまさにカーターによる自由主義化の圧力であったと、強く信じられている。そしてこの政府が、民族解放勢力を単に封じ込めることから（グレナダのように）それら勢力を権力についた国から「押し戻す」ことへと、含衆国の対外政策を根本的に手直した時には、この政府が左翼を政権に一層近づけるかもしれない演習（＝選挙の実施）に対し共感を示すことはありそうもないと、観察者たちは述べている。

別の主要な障害はマルコス自身である。選挙の選択の支持者たちは、独裁者の——自然の原因による——早い死去を望んでいる。なぜならある専門家が述べているように、「棺に入る以外にマルコスがいなくなる方法はない」ことを実感しているからである。彼らの見るところ、独裁者はこの国を1984年5月の国民議会選挙に導く上で「安定化の役割」を果たしているが、選挙後の「配置」においても彼がまだ存続するならばそれは配置の信用を傷つけるだけだろう。

第三の紛糾要因は、いかなる「平和的移行」に対しても、マルコスの基盤——新社会運動(KBL)に結集した軍・彼の親友・地方や地域の専制的な長官——からおそらく生じるとされる抵抗である。マルコスと共にあるいはマルコスが去っても、この部門は虚偽と暴力を通じて獲得した特権と地位のための強力な保証を要求するだろう。

マルコス王党派のかんりの者は、現在ではマルコスの親衛隊長も兼ねる陸軍参謀総長ファビアン・ヴェールと大統領夫人イメルダ・マルコスにより指導されるマルコス以後の政府を、彼らの保険証券と見なしている。そこでは前者が抑圧的腕力を、後者が政治的基盤を与える。だがヴェールとイメルダはひどく不人気であるため、この可能性は含衆国の設計者が断固阻止しようとしている一悪夢に終わっている。

ヴェールは「専門家将校」に対立する「政治将校」として見られている——つまり彼は大統領一家との結びつきを通じてトップに昇りつめた人物であり、その地位は軍の重要な地位への同じ

30) 「マルコス以後のシナリオ」についての「機関相互間の討議」に出た人で、我々が話したほとんど全てのコンサルタントあるいは参加者は、軍の専門家やテクノクラートの「移行期」における「安定剤」としての役割について含衆国政策作成者が述べた重点を、強調している。そのうちラモス (Ramos) 将軍がフィリピン軍部内でペンタゴンの好意を得た人物であるならば、セザール・ヴィラタ (Cesar Virata) 首相はテクノクラシー内における銀行家のお気に入りである。ヴィラタは既に、自分は政府高官が暗殺の責任を負うとの可能性を「除外する」わけではないと公言することにより、またマニラで9月の終りに起きたデモの後戒厳令を再び課するというマルコスのおどしに対して公然と反対を表明することにより、マルコスから距離をとっている。

様な政治的任用者のネットワークに依存している。合衆国の望む軍の統制は、参謀副総長フィデル (Fidel) ・ラモスによって代表されるような、不満のある職業軍人を基盤とするものであり、ラモスは合衆国主催の軍事訓練計画と合衆国軍学校での教育を通じて、ペンタゴンとの伝統的に親密な結びつきを持ってきた。職業軍人の大部分は、NPA と実戦を戦っている戦場で部隊を指揮する大尉や大佐であるが、他方「政治将校」は、安楽な参謀本部の地位にいるか又は独裁者を守る任務を負う都市を基盤とする部隊に結びつけられている。「もしマルコスが死亡しヴェールが行動を起こすとしても、アメリカ人がそう言うならば職業軍人が兵舎を出ることはないだろう」と、国防省の一コンサルタントが述べているが、これは、マルコスがいなくなれば反乱鎮圧機構を機能させている軍事援助を供与する合衆国からの指令の方に、職業軍人は引き寄せられるだろうという、ペンタゴンの信念を反映したものである。

選挙のシナリオにおける第四の問題は、エリート野党の状態である。この部門は、彼らの草の根政治機構を破壊したマルコスの効果的な作業によってひどく弱められただけではなく、アキノの喪失と共に信頼できるまとめ役を失っている。UNIDO の総裁の元議員サルヴァドル・ラウレル (Salvador Laurel) は、過去の腐敗と日和見主義により、信用を傷つけられている。カガヤン・デ・オロのネネ・ビメンテル市長は魅力的で大衆的な人物であるが、少なくともここしばらくは、より古い既成のエリート政治家の受け入れるところではないだろう。アキノの水準に迫っている人物の元上院議員ジョクノは、旧式の政治を拒んでおり、またアメリカ人といかなる取り引きをすることも拒否している。更にエリート野党は、——アメリカ人がマルコス以後の伝統において不可欠と見ている、軍の専門家やテクノクラートのような「よりきれいな部門」をも含んだ——マルコス連合のいかなる一派とも取り引きをしていると見られることは、大衆運動における死の接吻となろうということ、を理解している。

経済が議会制民主主義の選択にとっての、五番目の大きな障害である。経済は、アキノの言葉を言い替えると、マルコスにとってだけでなく後継者志望のどの政府にとっても、アキレスの踵である。合衆国の支持を受けるいかなる体制も、(現)体制が招いた大量の対外負債——それは1983年末には260億ドルに達すると見積もられている——の元金及び利子の正式の支払いを、避けることのできる方法はないのである。ある人は、これらの支払いは今や一年に30億ドルになると、計算している。

アキノ暗殺の余波の中で、1983年10月末に始まる3カ月間政府は元金の支払いを停止した。そして現在は国際通貨基金との予備協定の結論を出す過程にあるが、これは、民間銀行への滞納金を支払い必要な輸入品の代価をカバーするために、6億5千万ドルを供与するものである。破産申立の防止に要する今後の民間ローンは、IMF の「安定化」計画に合致する厳しい耐乏措置——輸入の削減・政府支出の大縮小・増税・賃金カット——の適用を条件とされている。

この体制が耐乏を首尾良く課する上で必要な正統性を失ったという不安から、銀行は実際に選挙の選択を支持する姿勢を示してきた。換言すると、成功するためには、耐乏が「民主化」されなければならない、あるいは選挙に由来する正統性を持つ政府によって適用されなければならない。しかしながら、その(耐乏実施の)ためにIMF と民間銀行のための徴収機関として行動することほど、議会制政府の正統性を——中産階級の間においてさえも——腐食させる上で、より容易な方法は他にないのである。これはフィリピンにおいてだけでなく、またブラジル・アルゼンチン・チリにおいても、独裁制の後継者を志望する議会制(政府)に付きまとうジレンマである。

アキノはもっと明晰な状態にあった時に、マルコス以後の議会制政府にとってのぞっとするシ

ナリオを予知して、こう描くことができた。――

御覧なさい。マルコスが倒れ、あなたが登場し、共産主義者があちらに退り、人々があなたの奇跡を期待するという場面です。私はどうやって300万人に仕事をあてがうのでしょうか。私はどうやってピートのためにガソリンの値段を下げるのでしょうか……そこで人々は言うでしょう。「イエス・キリスト、あなたは私たちが8年間待っていた人なののでしょうか。あなたはもっと悪い！」……私はうけあいますが、登場する最初の人は6カ月で吹きとばされるでしょう。次に第二の人が登場して、彼も6カ月で吹きとばされるでしょう<sup>31)</sup>。

### 動乱の将来

従って近い将来は、一連の不安定ながら合衆国に支持される政府が続くという陰気な見通しを約束するものである。その政府は――権威主義的なものであればあるいは議会制的なものであれば――取り換え可能な一団の将校・テクノクラート・それにエリート民主主義者で構成され、そのいずれも左翼へ向かうフィリピン政体の歴史的な勢いをおしとどめる試みに成功しない。

11年間の剝奪の後に権力に飢えたエリート野党の一部は、ただもう議会制のわなに陥っているように思われる。しかしフィリピンの政治劇における唯一の役者は、展開中のシナリオを十分に理解している――その役者とは民族民主戦線(NDF)であり、この政治勢力をマルコスとアキノの両者とも戦略的脅威として見なしたが、根本的に違った方法で取り扱うことを試みたのだった。

NDFはこの時点で、国家権力を掌握する未熟な試みに進んで引き入れられたくないと、述べている。1950年代に旧左翼が採用したところの「迅速な武装蜂起」の悲惨な戦略の教訓が、余りに深く心にしみこんでいる。都市への移住にもかかわらず(未だ)人口の60%が住む、農村部における武装闘争の力学こそが引き続き、国家権力を求める最終攻撃をいつ行うかを決定する際の第一の決定要素であり続けるだろうと、その宣伝者は繰り返している。それは、運動が政治的支持者と軍事力――「臨界質量」――を達成して、NPAの戦略家が「戦略的攻勢」と呼ぶところのものに移るまで、待つことになるだろう――そしてこの段階は、マニラやその他の都市中心部における蜂起と連動して、農村部の戦場でフィリピン軍を全滅させるためNPAの大正規軍部隊が行う最終的決戦により、特徴づけられるものである。1975年のヴェトナム流の解放日は数年後のことであると、その実際の強さへの前進を注意深く測ることは定評のある運動の指導者たちは述べている。

そしてその時点で、形式的な民主的機構であればあるいは権威主義的な解決法を用いてであれ、この社会の状況を安定化させるのに失敗してきた合衆国が、今一度、軍隊を用いて東南アジアにおけるもう一つの民族解放運動を破壊するために公然と干渉するか否かという問題に、直面しなければならなくなるだろう。

31) 'The Philippines: the more things change...', p. 16.